

浜名湖環境保全・活動団体交流会 報告

●日 時 平成29年3月11日(土) 9:45~12:45

●場 所 OMソーラー社屋「地球のたまご」

●参加者 27名

1. 挨拶



2. 会場提供者の施設紹介



はまなこ環境ネットワークの芥川会長より、ネットワークも設立10年以上経過しており、過渡期に入っており、本交流会で今後の方向性についてみなさんから意見をもらいたいと述べた。

会場提供者のOMソーラーの村田氏から自然エネルギーによる本施設の概要や施設の使われ方などを説明した。

3. 報告(県主催環境教育事業及びアマモ再利用プロジェクト、アンケート結果報告)



はまなこ環境ネットワーク事務局の山内氏より、県主催事業で実施した「浜名湖エコキッズ体験塾」の実施内容を紹介した。

また、ネットワークの自主事業で行っているアマモ再利用プロジェクトにおける、アマモ・アオサの現状、回収状況、野菜の種まき、収穫などの取組が紹介された。

4. 講演

① 講師：加藤 正敏氏 (みなと塾 代表)

「東三河地域での環境保全活動の紹介」

加藤氏は、農協退職後、「みなと塾」を組織して東三河地域で三河湾の前芝海岸を中心に豊川流域において、自然環境の調査、干潟のいきものなど自然観察会、海岸清掃などの市民レベルでの環境保全活動をしている。

三河湾の埋め立てや臨海部の開発により、前芝海岸など「六条潟」の環境の大切さを訴え、市民レベルでの活動を行っている。みなと塾の会報誌を発行し、活動を広く紹介している。





三河湾はかつてアサリが多く獲れた所で、「六条潟」は唯一残っている環境であるが、近年アサリがとれなくなり、アサリが生息なくなると水環境は悪くなるが、そのことを市民は知らない人が多い。そのため、市民に「六条潟」、そして前芝海岸の環境を知ってもらうための市民向けの環境学習を提供している。

三河湾の水は航路など浚渫したところは、貧酸素になり、その水が前芝海岸に来てアサリなど貝類が死滅すことも起きていると説明した。また、海岸の清掃活動や河口付近の環境を見学する観察会なども行っている。地元子どもたちが環境を学ぶ時に、サポートしてくれる「前芝はまレンジャー」も組織して、応援体制も整備している。

その他に、三河湾の一斉水質モニタリング調査や前芝探検隊（浜名湖のエコキッズ体験塾）、年3回ごみ拾いのクリーン作戦を行っている。清掃に併せていきもの観察会や環境の勉強会なども行っている。夏には川灯籠まつりを開き、いきものの絵を灯籠に書いて浮かべている。いきものカルタを作って、前芝海岸のいきものをPRしている。

<会場からの質問>

Q:アサリは浜名湖も危機的状態で、今年も潮干狩りができないかも知れない。漁業者もアサリを育てているが、浜名湖からアサリが棲めなくなると浜名湖の環境がダメになると考えており、みなと塾は漁師とも連携を図っているのか？

A:7～8年の活動でようやく認知されてきたところで、漁師さんにもようやく活動を理解されはじめてきた。したがって、漁業者との連携はまだできていない。その点は浜名湖に学びたいと思っている。特に市民が知らないので、市民に知ってもらう活動が中心で7～8年で連携がはじまった。



5. 情報提供・話題提供

浜名湖周辺の環境保全活動団体等の取組み紹介

講師:田中 孝治氏(浜名湖サイクルツーリズム推進会議 座長)

「サイクルツーリズムから見た浜名湖の環境と観光」

浜名湖観光圏や日本風景街道ルートとして、浜名湖の自然を活かしながら、官民が連携してサイクリングを通じて国内外からの観光誘客の取組みをしている。

サイクルツーリズムを推進している立場から環境と観光の共生について、浜名湖サイクルツーリズム推進会議の田中座長より、話題提供してもらった。





浜名湖では観光庁の観光圏、国土交通省の日本風景街道ルート登録により、サイクルツーリズムに取り組んでいる。いまサイクリングブームによって、これまでと環境が変わりサイクリングが一般化してきた。これまでは特別なヒトの遊びとか競技であったが、アニメや TV 番組などの影響で一般の人がレジャーや健康スポーツとして気軽にサイクリングを楽しめる

ようになり、昨年 12 月には「自転車活用推進法」が公布され、自転車観光に向けた法整備もされて、これから全国各地で自転車によるまちづくりが進むと思われる。

その中で、浜名湖は平たんでもあるので、水辺の湖岸を散歩感覚でサイクリングを楽しむ（散走）ことができるとして人気が高いエリアである。かつて、木下啓介と浜名湖に来た時に、彼は浜名湖の廃船は気にならないが、ゴミは気になると言っていた。風景に合うか合わないかを問題視していることかと思う。

自転車は身近な自然を肌で感じるできるので、浜名湖は自然環境と農業や漁業などの営み風景が整っていることが魅力である。この環境は守ってってもらいたいと考えている。そのため、環境と観光のバランスをとらないといけない。

野鳥が飛来している風景など魅力的な浜名湖の環境が守られていることがサイクルツーリズムにとっても大切なことなので、サイクリストにもそのことを伝えたい。何か関わることができれば協力していきたいと語った。

6. ワークショップ（意見交換）2グループ

テーマ：これからの浜名湖の環境保全と活用（ネットワークの方向性）

グループに分かれて、意見交換を行った。最初に各自の活動紹介を行った。そして、ファシリテーターの進行により、これからの浜名湖の保全・活用の“連携”に関する方向性について意見やアイデアを出した。



Aグループ

■これからの方針：団体の力を集結して浜名湖の良さを知ってもらう

■個々の活動紹介

○むらちやネット（NPO）

- ・団体では農業、イベン、介護（弁当提供）の3つの部会で活動
- ・耕作放棄地の解消 → 農作物を作る
- ・ひまわり、菜の花、コスモスの種まき
- ・会員が増えない、
- ・若い人が入らないのが課題（無報酬のボランティアだから、資金がない）

○野鳥の会（市民団体）

- ・ガーデンパークでの写真展、探鳥会、遊覧船での探鳥会などを実施
- ・浜名湖を中心とする鳥の図鑑を協働で作っていききたい
- ・図鑑作成のデータベース作成で連携（鳥の情報提供できる）
- ・貝を食べる鳥のデータ → データはある

○館山寺温泉観光協会（各種団体）

- ・舟運、地引網
- ・遠州道中膝栗毛の観光ツアー（地元しか知らないところを案内）花めぐり体験、みかんめぐり体験など体験型観光を提供している
- ・毎月第1火曜日は海岸清掃を行い、花植えをやっている
- ・NWにはアマモ場の保全を期待している
- ・館山寺↔気賀の舟運事業がはじまる
- ・気賀では都田川の清掃（県のリバーフレンドシップ協定）
- ・リバーフレンドシップ協定を結んでいけたなら

○スズキ（株）（企業）

- ・従業者（家族）が県（NW）がやっている環境教育に参加
- ・会社として、それ以外に引佐の山で植林活動と工場周辺地域の清掃活動
- ・その他、CO₂の削減の取り組みをしている
- ・本社6000人には呼びかけをしているが参加が少なくなっている（原因はわからない）

○若松会（松井康雄・個人）

- ・浜松市の環境学習指導員養成に参加した
- ・周辺のホテルに泊まって歩いている
- ・学校での環境学習教室の指導員をやっている
- ・芳川をきれいにする会 芳川の清掃
- ・芳川は染色工場からの排水で川の水がみどり色に染まる

○須山建設（企業）

- ・アマモの回収に協力、アマモの野菜作りにも参加
- ・NPO 浜松アメニティクラブ 清掃活動をやっている
- ・刺激を受けている

- ・社会貢献もやって役所にもアピール

○舞阪町観光協会（各種団体）

- ・1月から弁天島でカキ小屋をやっている
- ・協会としていろいろ事業やっているが、今まで何もしなくてもよかった
- ・観光協会自体が知られていない
- ・直虎効果が少ない →アピールが少ない
- ・磯遊び体験を提供している（海の体験スクール）
- ・あさはり漁獲だけでなく、湖を守るにも重要であるので、協会も体験学習に協力
- ・浜名湖サイクリングロードの案内が大変 道を何とかしてほしい

★これからの活動に向けた意見・提案

■広報誌の充実

- ・各団体がやっている活動の実績を広報誌に入れていく
- ・みなと塾の広報誌のように環境のデータを作って発信していければ→広報誌の充実
- ・情報を整理して紙にして配る

■インターネットの活用（復活）

- ・情報がネットワークに吸い上げられていない
- ・情報の蓄積をしていく
- ・団体情報（活動）や連携情報 活動情報を入手できるしくみ⇒NWが担ってほしい情報入手の仕組みをつくり、情報を蓄積して行ってほしい
- ・活動情報をつかんで発信してほしい
- ・活動情報を入手できる仕組みを考えないといけない
- ・連携取れそうな団体もいるが情報発信できていないので支援してほしい
- ・ただし、事務局に過度な負荷がかからないようにはしたい
- ・かなり多くのことをやっている（実績はある）→そのことを知ってもらうことが大事
- ・資料はスキャンしてHPで紹介していくことも大切

■浜名湖の環境の冊子やシリーズ化づくり

- ・情報を冊子にして配架したら知ってもらえるのでは・・・
- ・県が今年度作成した環境のパンフレットでは不十分（分野別にシリーズ化して発行）

Bグループ

■活動の方向性 “海の湖”として売り出す

夏でも冬でも体験できるので体験型の学習メニューを提供

■意見

○まずは浜名湖について知ってもらうことが大切

- ・浜名湖の中に入ってもらう
- ・干潟に入ってもらう
- ・水の美しさを知ってもらう
- ・舟に乗った人の満足度は高い→でも…お客は少ない
- ・遊覧船で体験できるので活用してもらいたい（遊覧船は定期便で11万人+αが利用）
- ・いままでは浜名湖の食材で観光客を呼んでいた
- ・これからは体験ツーリズム→環境学習

○どうやって知ってもらう

- ・漁業を観光と連携
- ・興味と価値が分かればヒットする

○団体情報の提供

- ・各団体の活動を知りたい
- ・範囲が広いので…（情報がほしい）

○接着材が必要（助成金の獲得支援）

- ・市の助成金の審査は厳しい
- ・農林水産課の助成はダメでした→助成金獲得の支援を！
- ・助成金の情報がほしい
- ・助成金申請の書類作成を手伝ってほしい
- ・助成金獲得のための講座を開いてほしい

○あさりのふるさと、浜名湖のアサリを大切にする

- ・浜名湖は風景とあさり
- ・あさりを作る体験
- ・あさりのふるさと浜名湖
- ・袋にあさりを入れる
- ・地面に網であさりを作る（4坪ぐらい）
- ・小学校の課外授業

○マングローブも観光資源

- ・マングローブ池300㎡に100本程度ある
- ・1mくらいの高さの花がある
- ・マングローブヨシに替わる樹木

○竹や里山保全とも連携

- ・37年刃物の製造が竹に活用
- ・浜名湖で竹を使う、農地の肥料化

- ・竹のサプリメントを開発している
- ・カキ棚の竹は三重県から購入（地元の竹を使っていない）
- ・夏の中高一貫校（中学三年生 120 名が 2 泊 3 日で来る）
- ・非日常の体験をしてもらう
- ・活動に来てくれる人のメリットを考える
- ・竹を 3.5 km 繋げてギネスへ
- ・里山から浜名湖までPR



7. 全体発表及び総括



これからの連携、ネットワーク組織のあり方として、意見のとりまとめを行った。

●情報発信、情報提供

- ・連携のためには、浜名湖で活動している団体の活動情報が発信できるようにする
- ・手法：広報誌、インターネットの活用

※はまなこ環境ネットワークのHPは閉鎖され、ブログ・FBだけであるが、情報発信ツールとしてホームページは不可欠。活動のチラシをPDFで紹介するだけでも効果があり、各団体が参加者を増やすためにもネット環境の整備は重要であるので、復活してもらいたいという意見が寄せられた。

●啓発活動

- ・一般の人に浜名湖の環境を知ってもらう体験学習
- ・湖内から里山の環境まで様々なプログラムが提供できる

●活動の連携を図れる場（機会）をつくる

- ・現場での活動（環境教育、清掃活動など）で連携する
- ・ネットワークが接着剤の役割を担う
- ・団体が互いに交流する「交流会」

●活動資金確保のための支援（接着剤）

- ・助成金情報を提供（市民協働センターでは範囲が広すぎるので環境分野に特化）
- ・活動の助成金を獲得するための研修会開催